
けんぷファー With ~AGIT~

NAVAHO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けんぷファー With AGIT

【Nコード】

N0557Z

【作者名】

NAVAHO

【あらすじ】

けんぷファーと仮面ライダーアギトとのクロスオーバーです。

朝、起きたら趣味の悪いぬいぐるみが話しかけてきた……
オレの名は瀬能ナツル。自分が大嫌いな17歳だ……

第一話「それは、奇妙な出会いだった」（前書き）

連載結構やっているのに、あとやるといいながら未だにやらない呀
を置いておいて、こっちを掲載するのはどうよと思いつつ、やっ
てみました！！！

第一話「それは、奇妙な出会いだった」

「はあっ、はあっ、何よ!?!あいつは!?!」

夜の街を一人の少女が逃げていた。時折背後を振り返る。表情は何かに怯え、それから少しでも遠くへ逃れるように……

少女の遙か背後から、それはゆっくりと歩みを進める。闇夜に浮かぶ一对の緑色の野獣の視線が、鋭く少女の背後に向けられている。

街灯の明りが、そのシルエットをあらわにする。それは二足歩行で立つ半神半獣の異形である。赤いマフラーをなびかせ、自身の頭上より光の輪を出現させ、

「KEMPFER」

強固な顎に並んだ牙を含んだ口より、言葉が紡がれると同時に光の輪より弓矢が現れる。

無防備となった少女めがけて、矢を構え、勢いよく放った。

”ヒュン”

勢いよく空を切り、矢は少女の胸を貫いた。背中からくる衝撃に対して驚愕の表情をするものの、はつきりとした感情を自覚する前に彼女の意識がこれ以降のことを自覚することはなかった……

アスファルトの上に倒れた少女の右腕には、仄かに光る青い腕輪が存在していた。

「KEMPFER」

獲物をしとめた狩人のごとく半神半獣の異形は、再び光の輪を頭上に発生させ、その中に昇天するかのようになくなっていった……………

「おはようございます。ナツルさん」

朝起きたら、ぬいぐるみが話しかけてきた。

何事だ……っと言つのがオレの感想である。

オレの名は、瀬能ナツル。歳は今年で17になる一般的などとは言えない人間である。

普通ならごく平凡な 学生というのだが、オレはどちらでもないのだ。というか、学生ですらない。過去に色々あって、学校というものを拒絶してしまった。

話を戻してどちらでもないというのは、オレは男でもないし、女でもないのだ。他人がオレを一目見たら、女と認識するだろう。髪も長いし、そう思われるのはしかたない。

平均的な女子の身長を超えているが、男子としては平均的、胸にあるものは男子になく、女子にあるもの。これがまた、でかいのだ。家庭教師の先生がいうところ、平均のものを軽くこえるらしい。

学校は行つてなくてもちゃんと勉強はしているぞ。家庭教師の先生は、かなりの美人さんである風谷 真魚さん。オレは、真魚ねえと呼んでいる。

小柄で女らしい部分がちやんと整っていて、可愛らしさとどこことなく凛とした美しさがまぶしかったりする。

それに比べてオレは、只体がでかい。手も普通の女の人よりも大きくて、なんとなく男っぽい。真魚ねえは、オレの事をカッコいいと言ってくれるが、そうかな？

カッコいいって、オレみたいな男でも女でもない半端者じゃなくて、もっと男らしい人に贈る言葉だと思うが、女の人にもそれは適用されるらしい。よくは、わからないのだけれど。

学校に行かないからと言ってニートとかそういうのばかりじゃないからな。世の中、ちゃんとやっている人はやっているんだ。

また、話がそれてしまった。オレは、世にいう両性具有というやつで、男と女の両方の特徴を持っている体なのだそう。外見は、完全な女よりであり、声も高いソプラノ系である。

生まれた時は、男だったのに成長するに従って女寄りに変化するのは、人生わからんものだと常々思う。

以前、病院で検査をしてもらった時にわかったのだが、オレは男女両方の機能を持っていて、男としても女としても子供を作ることができる。生まれた子供は、オレをパパというのだろうか？それともママというのか？

いや、オレはパパにもママにもなれるらしい。などとこんなややこしい身の上、オレはきっちりルールづけられた世の中では非常に肩が狭かったりする。

男でもなければ、女でもない。他人からすれば半端者でしか映らない。これのおかげで過去に色々あって、荒れたりもしたが、今となつては、自分の身の上を客観的に見えるまでに回復している。

「どうしたんですか？ ナツルさん。聞こえてますか？」

ぬいぐるみが、返事の無いオレに対して、また話しかけてきた。ここで”返事がない。ただの屍のようだ”と言ったら、オレは間違いなく蹴りを入れていたと思う。

「まだ、寝ぼけているのかな？ もう、そういう年だろうか」

花の十代という表現はどうかと思うのだが、オレが使ってもノープロブレムだから、大丈夫だ。ぶつぶつと呟きながらオレは洗面所へと向かって行った。

オレの部屋は二階にあるので、一階にある洗面所まで行かなければならないのだ。

「おおっ！！！！！！ ナツル、今日も朝が早いな！！！！！！！！！！」

洗面所へ向かう途中で、朝も早くからハイテンションな声が聞こえてきた。このハイテンションな声の主は、今、おれがお世話になっている下宿先であるレストラン アギトのオーナーシェフ 津上翔一さんだ。

ここでオレの下宿先が出てきたが、普段のオレはレストラン アギトで働いているんだぞ。どうだ、遊び呆けている同世代と違いオレは、しっかり働いているんだぞ。

またまた、話がそれてしまった。この人のおかげで今のオレが成り立っているのだが、未だに慣れないのがこの人のおもしろくもない冗談を言うことと天然なところについていけない。

面白くない冗談の例としては、茶をだして”ちゃっちゃつと飲んでください”など、ダジャレを平気で空気を読まずに言うことである。このダジャレには、皆悩まされているが面と向かって否定できるつわものはいない。

「おはようございます。朝から早いですね、もう少しゆっくりしてもいいんじゃない?」

「そういう、ナツルも早いじゃないか。ナツルはもう少しゆっくりしてればいいから、あつ、それと美杉先生のところまでお使いをお願いできるかな?」

「美杉先生のところですか? 一体、どういう?」

美杉先生。昔から、翔一さんがお世話になっている城北大学の心理学の教授で、荒れていたころのオレに色々世話になってくれた人で酒癖は悪いが、基本的にはいい人で、信頼に足る人物だ。生意気な息子が一人いる。

奥さんは海外に出張していて、オレも翔一さんも未だにあつたことがない。最初は、美杉先生のところに住んでいたのだが、これ以上

お世話になるのもなんとなく気が引けてしまったので、オレは家出
当然で、レストランアギトで下宿している。

”いつまでも、ここにいてもいいんだよ”と優しく言ってくれたの
だが、オレ自身、これ以上世話になって迷惑をかけたくなかったし、
それ以上に早く自立がしたかった。

自立できれば、美杉先生にも迷惑をかけることもないし、一人立ち
で来ているところを見れば、皆も安心してくれるんじゃないかって
思っている。以前、このことを家庭教師の真魚ねえに言ってみたこ
ころ、

”そういうものじゃないと思うけど、伯父さんが心配しているのは、
ナツル君がこのまま私たち以外としかかかわらずに生きていくこと
を心配しているんだよ”

私たち以外か、実を言うとオレはこの体のため、実の両親から拒絶
されている。昔見た漫画なんかでも”人間は、自分達の理解できな
いモノを拒絶する”という言葉があっただが、これはオレが実を
持って知った言葉でもある。

小学校卒業間近ごろに体に変化が起きてきたんだ。その時は、単な
る成長期によくでるホルモンの異常かと思っただけで、そうでも
なく、オレの体は本来なら男らしくなるはずなのに、徐々に女より
に変化していった。

初潮もそのころに迎えていて、このころにはオレの中にあつた”女
の部分”が完全に機能し始めたんだ。当然、皆が皆、こんな異常な
体のオレを理解するのは難しく、自然とオレは煙たがられはじめた。

両親の方も、よくわからない生き物となったオレを自分たちの子供として見なくなっていた。そして、中学二年のころにオレの前から姿を消していった。ようするにオレの傍に居たくなかったんだな。

当然のことながら、学校では色々と言われたりした。男でも女でもないから、どっちにも居場所の無いオレにとつて、居心地の悪さは相当なもんだった。意外と女よりも男の方がぐちぐち言っていたのが印象的だった。

おかげでオレ自身、精神的にかなりまいっていて、荒れてた事があった。そんな時に出会ったのが、美杉先生と翔一さんだ。二人のおかげでオレは、あの頃の嫌な思い出を帳消しにするぐらいの良い暮らしができるようになった。

良い暮らしといっても金があるとかとかじゃなくて、自分を理解してくれる人がいるっていう幸せなんだ。だからこそ、オレはいつまでもこの人たちに甘えてばかりじゃいけないし、助けられてばかりじゃいけないんだ。

美杉先生と翔一さんもオレの気持ちを察しているのか、こうして職場で下宿しているオレの事をあまり言わないのだが、時々、先生の家に招待されるので、寂しいということはない。

みんな以外の人達がオレの事を理解してくれるだろうか？最初は、仲良くできてても、本当の事を知って”気持ち悪い”っていわないのだろうか。そうやって、拒絶されるぐらいなら、最初から誰にもかわらないようにするのが良い。

「なんでも、大学までちょっと来てほしいんだって。今日のシフトは夕方からでいいから、大丈夫だよ」

翔一さんは、オレに対していつものごとく能天気な笑みで言った。いつもながら、思うのだが、この人には悩むということはないのだろうか？悩んでいるところをあまり見たことがない。

せいぜいスーパーのチラシをみて唸っているところぐらいしか。かというオレもその口なのだが。レストランで働いている口だから、料理には並々ならぬ関心を持っていたりする。

和洋折衷なんでもござれだ。

「それよりも、昨日上げた”ぬいぐるみ”だけど、どうだった？」

翔一さんのこの言葉にぎょっとしてしまった。あのぬいぐるみは、道に迷ってしまった女子高生を助けたことで御礼に貰ったのだそうだ。あまりに斬新過ぎるものだった。

内臓がはみ出た虎のぬいぐるみでご丁寧に短刀を持っていたところから察するに腹切りか？あれは、翔一さんは、

”なかなか、かわいいじゃないか”

と言っていたが、オレから見たら趣味の悪いぬいぐるみのそれ以外の何物でもないと思う。オレじゃなくても、十人中十人が趣味の悪いものだと答える。絶対に。

翔一さんは、真魚ねえに上げようとしたのだが、それはそれで真魚ねえが困ると思い、オレが無理に引き取ったんだ。その引き取ったぬいぐるみがしゃべりだしましたとは、言えない。

「あ、あれ、机の上に飾ってある」

「おおっ!!! 気に入ってくれたかつ!!! いやあ、かわいいものには、人間だれでもそう思うんだよな」

何かに納得するような翔一さんだったが、あれをもらった真魚ねえの困った顔とその後の対応を考えると、翔一さんが落とす爆弾は創作料理とおもしろくないジョークだけでいい。

「うん。でも御礼にぬいぐるみを手渡すなんて、女子高生の方も女子高生だな」

翔一さんにあんな趣味の悪いぬいぐるみを渡した女子高生の顔を一度、拝みたいと思いつつオレは、洗面所へと歩いて行った。

鏡の中には、オレがよく知る少女の姿があった。これが、オレ瀬能ナツルである。一般的にみて、オレの顔は美人といわれる顔立ちをしていて、なおかつ肌が日本人離れした白さなのだ。

さつきも言ったが、オレの体は完全に女寄りで胸はでかい上にひっこむところはひっこんでいて、スタイルは上に入る。自分でもなんだが……

今や、連絡どころか消息すら分からない両親とも似ていない。本来通りに成長していたら、オレはきっと自他ともに平凡な奴になっていただろうな。将来の夢は、公務員に間違いない。

両性具有はどういうわけか、美系といわれる人間が多いらしい。お客様さんは、オレの事を美人と言ってくれているが、オレ自身そういう自覚はない。見た目は良くて、中身にある理解できない秘密を

知ってもそう思うだろうか？

レストランアギトで働いている時も、時々男から声をかけられるのだが、これは完全に無視している。たまにだが、女の方からも（汗）ガキの頃は癖っ毛で朝はすごいことになっていたのだが、成長するに従って髪はさらさらの質感に変化し、癖っ毛はなりを潜めている。いつものごとく見慣れた顔を洗うため、オレは蛇口をひね、顔を洗う。

「かわいいものをより多くの人に知ってもらいたいんだろう」

少し遠くの方で、翔一さんのつぶやきが聞こえてきた。

「お目覚めになりましたか？ ナツルさん」

部屋に戻ると同時に、ぬいぐるみが話しかけてきた。寝ぼけている

わけでもなく、夢を見ているわけでもないらしい。そうだ、これは間違いなく現実なのだ。

この異常な事態に対して、オレがこんなに落ち着いているのを第三者が見たら、きつい言葉を掛けてくるだろう。

だけど、オレはぬいぐるみがしゃべりだすという事態以上の異常を知っているのだ。

「お前は、なんだ？」

それは、オレが翔一さん達と出会う前に血縁上の親に掛けられた言葉。オレのこのどつちつかずの体に現れたもう一つの変化を見たあの驚愕の表情。

自分の子供が”化け物”になるところをみたらな……

”お前は、なんだ？”

「わたしは、ハラキリトラ。調停者”モデレーター”のメッセージヤーです。簡単にいえば、神様のお使いである天使」

「内臓を出した天使なんて聞いたことないぞ」

これは、オレがこの異常事態に対して、初めて反抗した瞬間でもあった。

ナツルは、一人バイクを走らせていた。美杉先生との約束のために彼が居る大学へ向かうためである。

(まったく、朝から変なことを聞いて、気がめいる)

ナツルの脳裏にあの趣味の悪いぬいぐるみことハラキリトラとの今朝のやり取りが浮かんでいた。

「ナツルさん。あなたは、モデレーター”調停者”に選ばれたのです。あなたは、これから戦わなくてはなりません」

選ばれた？誰に？

「一体、どういうことなんだ。戦うなら、警察か軍隊の方がいんじ

やないのか？」

これは、もっともな意見だ。戦うのなら、いい心当たりがあるのでそこを紹介したいところだ。

「いえ、わたしにもどういうことなのか、わからないのです。ですが、あなたが戦わなくてはならないことだけは、確かなことなんですよ」

穏やかな口調でハラキリトラは、オレに話しかけてきた。わからないって、訳がわからない。

「そうなんですよ。モデレーター”調停者”は、けんぷファーを選ぶために、私たちをよこすんですが、あなたは、けんぷファーじゃないんです」

けんぷふぁー？何なんだ。選ぶため？ますます訳がわからない。

「じゃあ、オレはけんぷふぁーとかいう奴じゃないのなら、どうして戦わなければならないんだ？」

話を聞くに、こいつは戦う存在であるけんぷファー選ぶためによこされるスカウトマンみたいなものだ。だけど、オレは、けんぷファーじゃないのだ。なのにどうして、選ばれる？

「そうですね。けんぷファーは戦うためだけに存在するので、絶対的な力が保障されます。だけど、あなたにはけんぷファーよりもはるかに強い”力”を感じます」

遙かに強い戦うためだけの力。まさか、こいつ!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!

その瞬間、オレの頭に一気に血が昇るのを感じた。気が付いたらオレは、ハラキリトラの首を絞めるように持ち上げていた。

「な、ナツルさん。く、苦しいです。ちょっと、た、たんま」

「てめえ。オレのこれを知っているのか？どうやって、知ったんだ
!!!!!!!!!!!!!!」

オレには、この体以外にもうひとつだけ秘密がある。それは、絶対に知られたくない秘密だ。それをこいつは知っていると叫びやがった。

「知りませんよ。ただ、あなたの力をモデレーター”調停者”が必要としているのです。何のためかは、わかりませんが」

「じゃあ、そいつは今、どこにいる？」

もう少しきつくした方がいいのだろうか？はみ出ている腸に手を掛けてみる。

「わかりません。それ以上の事は、わからないんです。あ、それ、私の内臓です」

本当にハラキリトラは何も知らないらしい。だとしたら、モデレーターとかいうやつは、必要最低限のことしかメッセンジャーには伝えてないのだろう。苦しそうなハラキリトラの首を持ち上げた手を放した。

「……………そうかよ。じゃあ、誰と戦うかだけ教えて？」

「それもわかりません。怒らないで下さいよ。本来なら、けんぷフアー同士で戦わなければならぬのに、けんぷフアーでないあなたが戦うなんて、前例が今までにないもので」

前例がないか。ふざけた話だ。訳のわからない運命にもてあそばれるのかってか、これをあの人が聞いたら、まずモデレーターに手上げることは間違いないな。

ちなみにあの人とは、このバイクを買ったお店の店主だ。店主の名前は、芦原 涼さん。翔一さんとは、古い付き合いの人だ。

ここでふと時計を見たのだが、約束の時間まで、まだまだある。少しだけ、走ってきて気でも晴らそう。オレは、ハラキリトラに言葉を掛けることなく、部屋を後にした。

初めて気がついたが、あのハラキリトラの声。昔の静香ちゃんの声だったな。

「でも、いずれわかりますよ。だって、あなたの戦うべき存在は、けんぷファアのすぐ近くまで来ているのですから」

部屋に残ったハラキリトラは、扉の向こうに消えていったナツルに對してそう言い放ったのだった。

バイクを走らせていると、横目に近くの学校である星鐵学園の生徒たちが見えた。本来なら、オレもあの中にいるんだろつが、実際のオレはあれの外にいる。

自分で拒絶した場所だ。未練もなければ、希望もない。オレには、

オレの場所がある。それだけでいいんだから。

そんな時だった。何かが、オレの中を駆け巡った。

”キイイイイイイン！！！！！！！！！！”

まるでできの悪い電子音のような、耳を裂くような感覚がオレの体を走ったのだ。

「や、やばいつ！！！！？！！！！」

危うくオレは、ハンドルを切りそうになってしまった。切っていたら間違いなく大怪我をしたな。この感覚がとても気持ちが悪く、我慢が出来るものではないので、一旦道のわきにそれ、バイクを停止させた。

「はあっ、はあっ、はあっ、」

呼吸が荒くなり、胸が半端なく苦しい。何かに抑えつけられるような感覚で我慢が効かない。

「な、何なんだ。朝から、ぬいぐるみがしゃべりだすわ、選ばれたのだ、違うだの……」

気分が悪いのか、色々と愚痴が出てくる。男と女では、どっちかというと男の方がやたら愚痴るのだ。逆に女は決断が早く、物事をスバツと決めてしまう。

やたら愚痴るのは、オレの中にある男の部分が表に出るからだ。やたら、気分が悪い。どこかで休んだほうがいいだろうか。

「あ、あのく、顔色が悪いみたいですけど、大丈夫ですか？」

背後から、女の声が聞こえてきた。オレを気遣ってくれているようだ。こういうとき、人の優しさは身にしみるものである。

振り返るとそこには、十人中十人が美少女と応える容姿の女子高生が居た。身長は160前後で、きれいな茶色の髪を腰まで伸ばし、セイテツ学園の制服を着ている。学生に心配をかけるのもなんだし、

「うん。少し、気分が悪くなって、少しそこで休めば治るから、大丈夫……」

「本当に、大丈夫ですか？」

「うん。だから、早く学校へ行きなよ。遅刻するよ」

とりあえずオレは笑って答えた。笑っていれば大概の事は受け流される。オレの返事に対して女子高生がなぜか頬を赤く染めたのが少し気になったが、深い意味はないだろう。

オレはバイクを手で押しながら、近くの角を曲がった時にそれは、ぬつとオレの頭に突き付けられた。それは、この日本では絶対に見ることの無い拳銃だった。

「よお」

どこから聞いても好意的な声ではないのは、誰が聞いても明らかだ。

「お前が、あたしの敵なのか？」

視線を向けると、鋭い目つきをした赤髪の女が居た。こっちもセイテツ学園の制服を着ているから、女子高生だ。

「なんだか、情けねえつらしてるな。凶体はでかいのに、」

そう言って、その女は引き金に掛けた指を引こうとする。

「ちょ、ちょっとまってっ！！！！！！！！！！」

さすがに状況が状況なだけにオレも焦ってきた。いきなり路上で殺されかけるなど、日本のモラルはどこへ行った？とりあえず、この場合は正当防衛はOKだよな。

女が突き付けている拳銃を払いのける。払いのける力が意外に強かったのか、赤髪の女は、バランスを崩し、前に倒れこむような姿勢になった。

「いやに、力が強いじゃねえか、おまえ、けんぷファーか？」

力が女よりも強いのは、オレの中の”男の部分”のおかげ。見かけは女でも、体力とスタミナは平均の男子よりはる。それ以外にも理由があるが、そこまではしたくない。

「違う。オレは、けんぷファーじゃない！！！！！！」

ここで否定しなければならぬ。否定も何もオレは、けんぷファーに
関係するが、当事者じゃない。

「だったら、なんでけんぷファーって言葉を知っているんだ？」

「さっき、お前が言ったじゃないか!!!」

「うるせえ、あたしの名は、三嶋 紅音。冥土の土産に覚えておけ!!!」

紅音は、そう言ってオレに向かって容赦なく拳銃をぶっ放してきた。これを何とかして避けるが、相手はまるで容赦がない。

「なんで、戦うんだ!!!!!!」

いきなり因縁を突き付けてくるような相手に対して、話し合いが通じるとは思えない。

「うるせえ、お前があたしの戦うべき相手ってのは、あたしの勘が叫ぶんだよ!!!お前は、あたしの戦うべき相手だって!!!!!!」

そう言って、女はスポーツ選手顔負けの跳躍力でこっちに向かってきた。はっきり言って、女子高生としては異常だ。

「おらあ!!!!!!早く、反撃してみろ!!!!!!お前の武器は、剣、銃、それとも魔法か!!!!!!」

何やら、色々叫んでいるが、オレの力はそのいずれでもない。ただ、言えるのは、人間からしたら、アレは、化け物以外の何物でもないだろう。

「……………どっちでもないよ」

拳銃を放ちながら、紅音はオレに対しての攻撃をさらに強める。拳銃には弾数があるのだが、さつきから弾数を変える気配すらない。あの女の拳銃は弾数制限がないらしい。

仕方ないが、逃げてもこの紅音という女は、オレを逃がすつもりはなさそうだ。だったら、見せてやるよ。オレの秘密を。お前も秘密をしゃべったんだ。けんぷファーは、けんぷファー同士で戦うことを、

だったら、オレはモデレーターとかいう奴が送り込んだ”化け物”だっけことを教えてやる!!!!!!!!!!!!!!

ナツルは、紅音と向かい合うようにして立った。それは、まるで覚悟を決めたかのように堂々とし、表情は精悍な面持ちであった。

「おっ、やっとやるきになったか？」

紅音は好戦的な笑みを浮かべて、オレを見る。腹部に力を込める。体に分散した力を感じる。それが一つになり、ベルトを作り出す。ベルトの中央にある！龍の目”が黄金の光を放ち、渦巻く力の本流を現していた。

「な、なんだ！！？それ、」

紅音は、さすがにこの力”アギト”の事を知らないらしい。両手の前に突き出し、すばやく交差させて、ベルトの左右にあるスイッチに手を駆ける。

「変・身っ！！！！！！」

光がオレを包み、昆虫に似た赤い大きな複眼をもった目、黄金の龍を模した角を持ったオレのもう一つの姿 ”アギト”へと変わる。

「なっ！！！？！！こ、こいつ、一体！！！？！！」

あかねは、半年前に聞いていたけんぷふあーの特徴と大きく逸脱した”アギト”の存在に困惑していた。

けんぷファーは、女性にしかねない存在とメッセンジャーから聞いていたが、この”アギト”はまるで性別を感じさせないしなやかな肢体と強固なプロテクターを思わせる黄金のボディの両肩にある突起物は鎧を思わせる。

（お、おい！！！？！こんなけんぷファーが居るって聞いていないぞ。本当にけんぷファーじゃないのか？）

「……本当は、こんな姿には、なりたくなかった。だから、戦いを

やめてくれよっ！！！！！！！」

これは、オレの本心だ。この姿こそ、オレが実の両親に拒絶された最大の理由だ。忌々しい姿ではあるが、身を守るためには、アギトの力を必要としなければならぬことがある。今のように常軌を逸した脅威から回避するためには、

「何をごちゃごちゃと、うるせえこと言っただよっ！！！！！！！！」

紅音が拳銃を放ってきたが、今のオレには止まっているボールをバツトで打つよりも簡単に銃弾を払い落すことができる。右手で構えをとり、放たれた全ての銃弾をアギトは弾いたのだった。

「は、弾きとばしただとっ！！！！！！？！！？！！こいつ、素手で戦うのか！！！！！！？！！！！」

紅音は、アギトの桁違いの力に完全に驚いていた。普通、けんぷフアーは、武器を使って戦うのだ。中には、武器なしで戦うことのできるタイプが居るのだが、今、目の前にいるアギトはそれですらないのだ。

ただ、払っただけである。けんぷフアーの戦闘能力は、それぞれが保有する武器を介するのが普通である。だが、アギトは銃弾を払っただけなのだ。武器は己の肉体のみと言いたいのだろうか。

「はあっ！！！！！！！！！！」

オレは、両足の力を込めて紅音の前まで躍り出た。さすがのけんぷフアーも”アギト”の早さに反応しきれないのか、その目が驚

愕に見開かれていた。

「くそっ!!!なんてスピードだ!!!!!!」

反射的に紅音は、アギトに発砲するものの、アギトはそれらの銃弾を払いのけ、紅音に対して蹴りを上げる。

空を切るように紅音の顔すれすれで、近くの壁に蹴りを加え、まるで砂糖菓子を壊すかのようにいとも簡単に壁を砕いたのだ。

「!?!?!?!?!」

ぎょっとして、紅音は砕かれた壁に目を向けた。アギトの蹴りが入っていたら、自分は間違いなく一瞬で終わっていた。

(おもしれえって、言えねえ!!!!!!)

紅音は、相手はけんぷファーのように武器を使わずに戦えることと自分などよりも遥かに上の実力を持つ相手に対して焦りのようなものを感じていた。

だが、その焦りは少しだけ苛立ちへと変わる。ここまでの反撃を見せてもアギトは、戦いに対して消極的なのだ。その事実が、彼女の頭に血を登らせていく。

「くそっ!!!!!!ぶっ殺してやる!!!!!!」

苛立ちながらもアギトに対して攻撃の手を緩めずに、銃弾を放つがアギトはそれらを煩わしそうに払うどころか、全てを一瞬で交わしている。

（まるで猛犬だな。このアカネって子……）

紅音の戦いぶりに対して、アギトはそんな感想を抱いていた。一度くらいついたら、絶対に離さない猟犬の執念さながらのものを彼女から感じる。

アギトは、騒ぎが大きくなってしまふ前に決着をつけなければと考えていた。見た目、一般の女子高生のけんぷファーと違い、アギトの姿ははっきり言って目立つ。

人が着たりしたら、大変である。收拾がつかなくなったら、それこそ自分が終わってしまう。

（アカネってここには、悪いけど。ここは、思いっきりやるしかないか）

腹を決めて、アギトは紅音の背後に回り、軽くその細い首元に手刀を入れようとするのだが、

「はっ！……！……意外と消極的なんだっ！……！……アタシは、積極的にやるぜ！……！……！……！」

紅音はアギトが、戦いに乗り気でないことを察しており、アギトが自分を気絶させる方に動くのではないかと読んでいたのだ。

「戦いなんだから、もっと真剣にやらねえと！……！……！……命はねえ！……！……！……喰らえ！……！……！……！」

紅音は至近距離でアギトの顔面めがけて銃口を向け、発砲する。それは、紅音がとっさであるが持てる限りの力を込めて放った”力”であった。

強大な爆発音とともに爆炎が上がり、その反動を利用してアカネは近くの電柱へと飛び移った。

「よっしゃ！……！……あのやろうの角をへし折ってやったぜ！……！……！」

ガッツポーズを決めて、己の勝利を確信するあかねであったが、爆炎から現れたのは、倒れたアギトではなく手のひらを正面に掲げる不動の”アギト”の姿だった。

「なあっ！……！……？……！……！……つて、無傷かよ！……！……あの野郎！……！……！……！」

紅音は、己の力がまるで通用しないことに対して驚きの声を上げた。それも当然だろう。常識の範囲内であれば、けんぷファアの力は絶大だ。戦うために求められるあらゆる能力が秀でた戦士であるからだ。

だが、目の前にいるアギトは、その常識の範囲をはるかに超越した”非常識”の極みである。紅音は本能的に察した。”こいつは、けんぷファーなどよりもはるかに強い存在”であることを。

戦いの中で熱くなっていた気持ちが冷めていき、僅かに後悔の念を瞳に浮かべた。

「……はっ、手を出したのはあたしだ。けじめはつけねえとな」

これだけの事をすれば、たいていの相手は攻撃してきた相手を許すことはないだろう。紅音は、とんでもない相手に手を出してしまった己の浅はかさを恨みつつ、徹底抗戦を決めた。アギトから反撃が出るかと思いきや、

「やめろっ！！！！オレは、確かにけんぷファーを知っている！！！！だけど、戦う相手を知らないんだ！！！！わかるだろ、オレのこの”アギト”と”けんぷファー”は、戦うべきじゃない！！！！」

アギトこと、ナツルはこの戦いに対して、一つの結論を導き出していたのだ。今朝のハラキリトラの話を察するにモデレーターは、アギトをけんぷファーに関わる何かと戦わせたいらしい。

アギトが戦うべき相手は、けんぷファーではないのだ。

「けんぷファーと戦わないっだ？じゃあ、お前は、一体！！！！」

アカネは、アギトが戦う意思がないことに内心ほっとするが、納得できないでいた。アギトは、けんぷファーを知っているのだが、別に戦わなくてはならないと言っている。

じゃあなんだ？けんぷファーに何か、やばいことが関わり始めたのか？このとんでもない”アギト”という存在を必要とするほどに。

「わからないんだ。オレ自身、どうしてこうなってしまったのか。オレは、誰とも戦うつもりはないんだ！！！！！」

オレはとにかく、戦うつもりはないと紅音に叫んだ。紅音も紅音で戸惑っているようで半分頭がパニックを起こしているらしく、表情が酷く困惑していたのだ。

訳のわからない状況である。いきなり、戦わなければならないということを突き付けられ、しかも戦うべき相手がわからないといった状況に困惑しない方がおかしいであろう。

オレが戦うべき相手は、けんぷファーではない。だが、けんぷファ―は、どうやったのかは知らないのだがオレのアギトの力を感じ、戦うべき相手と決めている。

「何にもわかっていないだあ？どんな暢気な脳味噌してんだよ」

紅音は、アギトに対して半ばあきれた感情を抱いていた。執拗に攻撃をしてきた相手に対して、まったく戦う意思を見せないのは、心があまりにも大らかなのか、思考が恐ろしく能天気なのどちらかだろうと思った。

戦わなくていいのなら、それはそれで構わないとアカネは思う。先ほどまでは戦う気満々であったが、こうまで圧倒的な実力の差を突き付けられると、戦うことで命を落としかねない。

(こんなのと戦っていたら、埒があかねえな。こいつは戦う気がないっていうし、けんぷファーとも戦わないってんなら、それでもいいか)

紅音は、この場から離れることにした。相手があまりにも悪すぎるということと、その相手が戦う気がないのなら、自分がこれ以上攻撃をする意味はないのだ。

常人をはるかに超える跳躍力であつという間にアギトの前から姿を消した。

「あれが、戦わなければならない相手？けんぷファー？」

まったく、訳がわからない。オレが一体、何をしたというのだろうか。使いたくもないアギトまで使わなければならぬほどの事をし

たのか？

半ば、思考に囚われながらもナツルは、一瞬でアギトの変身を解き、もとの姿へと戻った。いつものごとく十代後半の女の姿だ。

「はぁ。この分だと、まだまだろくでもないことが続きそうだ」

悪いことは連鎖的に起こる。これは、ナツルが持つ持論である。一応、社会に出ている身なのでこういうことは、慣れっこのはずだがこれが続くとさすがに気がめいるかもしれない。

「あ、あの……………」

背後からまた、あの女子高生の声がした。さっきの紅音とかいう女も同じ学校の制服を着ていたな。オレに話しかけているみたいだが、どう答えたらいいのかわからない。

長々と悩んでも仕方がないので、とりあえず笑っておくことにした。騒ぎが大きくなる前にここから退散したほうが無難だろう。

女子高生に笑いかけながら、オレはどさくさで倒れてしまったバイクを起こしてからその場を後にした。

「……………素敵な方……………」

後に残ったのは、去っていくナツルの後ろ姿を見る女子高生 佐倉楓、只一人。しばらくしてから、学校の方でチャイムが鳴るのを聞いてから、一目散に駆けだしていったのだった。

物陰より現れた赤いマフラーを身に付けた異形の影に誰も気がつかなかった。

「……………kenpfer……………」

物陰より現れたそれは、半神半獣の姿を持ったジャガーであった。ジャガーロードである。獣のように鋭い眼光と知性を併せ持った目が私立セイテツ学園に向けられる。

「……………kenpfer……………」

鋭い牙が並んだ大きく裂けた口を開けて、ジャガーロードは頭上に発生した光の輪に溶け込むようにしてその場から消え去った。

城北大学

ナツルは、何度か足を踏み入れている大学のキャンパス内を歩いていた。

先ほどからずっと紅音という少女とのやり取りが離れずにいたのだ。

（けんぷファーか。あいつらも変身するのか？だとしたら、アギトの一種か、何かかよ？）

普通ではない体。アギトの力を持つナツルにも同様のことが言える。

けんぷファーは、見た目はまったく普通の人間とは変わりない。自分、アギトのような劇的な外見の変化とは違う。

（何かと戦うって、いったたよな。じゃあ、何だ。あいつらはけんぷファー同士で戦いあっているっていうのか？）

あのハラキリトラは、けんぷファーとかかわる何かとアギトを戦わせたいらしいのだ。正確にはモデレーターとか言う奴が。

昔、翔一さんから聞いた話だけど、どんな願いでもひとつだけ叶えることの出来る権利をめぐって13人の人間たちがアギトに近い力を使って互いに戦いあつたということがあつたらしい。

誰も願いをかなえることなく終わってしまったと聞いた時は、心底恐ろしいと思つた。

絶対的な力の赴くままに戦うことの先は、破滅しかないのだ。だからこそ、オレはアギトの力を忌まわしく思うことがある。こんな力がどうして必要なのかと。

このアギトの力の意味について翔一さんは、”決められた運命を変えられる力”であり未来に伝えなければならないといった。運命を変える力。

よくはわからないのだけれど、アギトの力は時として誰かを守るために必要な時が来ると教えてくれた。オレは、そうとは思わない。このアギトの力のせいでオレは実の両親から拒絶されている。

アギトの力さえなければいいのにと何度思つただろうか。この人間

には理解できないアギトの力を誰かのために使うなんて、オレには考えられない。

今朝の件みたいに、オレ自身の身を守るだけで精いっぱいなのだ。だからこそ、オレは誰にも関わらないようにしている。けんぷファ―に関わるのも正直、嫌だ。

そんなことを考えていると、オレの周りを楽しそうに騒いでいるキヤンパスの学生達が嫌にまぶしく思えたのは、オレの気が動転していると思いたい。

なんだかんだ言っただけでオレは、お世話になっている美杉先生のオフィスの前に立っていた。

「先生。ナツルです」

軽くノックをしてから、名乗る。

「ああ、ナツル君か。よく来てくれた、早く、入りなさい」

いつもの先生の声が返ってきたのを確認してオレは、オフィスへと足を踏み入れたのだった。

「これを見てくれないか？」

そう言っただけで、先生はオレに学校のパンフレットを数冊出してくれた。

「先生。これは？」

もっともなことをオレは聞いてみる。

「ああ、君もあのころよりも大分落ち着いてきている。そろそろ、自分のやりたいことを見つけに外へ出て行ってもいいんじゃないかな？」

美杉先生は、真剣な面持ちでオレに話しかけてきた。

「君は、立派に働いている。だけど、まだまだ伸びる可能性を秘めている。だからこそ、外へ出て、いろんな経験を積んでみることを考えてみてもいいんじゃないかな」

そう言つて、美杉先生はいくつかの学校の案内の特別枠を紹介してくれた。オレみたいな中学中退でも、入れる枠がいくつか存在しているのだ。特別な枠ではあるが、学校へ行くことができる。

だけどオレにとって、学校は悪夢のような場所だった。

”おい、あの女男がきたぞ！！！”

”男女だろ？で、どっちなんだ？”

”なんていうか、男のくせに、胸があるの？”

”女のくせに、あれがあるの間違いじゃないの？”

”親にも捨てられたらしいぜ”

”うわ〜、だから、気持ち悪いのかな？”

”男でも女でもないって…キモいかもね”

ナツルの記憶の中に居る”過去の自分”がそこへ行くのを拒絶する。

「ナツル君。大丈夫か？顔色が悪いが…」

美杉の言うようにナツルの顔色ははっきり青ざめていた。

はっきり言っあまり関わりたくない。いまでも思い出すあの生き地獄。未熟な人間が集まっているところで、半端なオレが受け入れられるだろうか？だから……

「先生。オレの事でこんなに真剣に考えてくれるなんて、すごくうれいす。だけど、オレは今のままで構いません」

「それは、どうしてだね？」

美杉先生がいかにも曇った表情でオレに訪ねてくる。

「はい。オレ自身、今の生活にすごく満足しているんです。働ける場所があつて、オレを理解してくれる人、オレを叱ってくれる人、オレの事を心配してくれる人が居て、なんていうか自分の居るべき場所って感じがして」

なおかつアギトの事を知つたうえで受け入れてくれる人たちは他にはいない。美杉先生もオレのアギトの力を知っている。先生は、オレが生まれるはるか前にアギトを知っていたんだって。

オレ以外のアギトもいる。オレがお世話になっている津上翔一さんも”アギト”の力を持っている。

「そうだな、君がそういうのも無理はないか。だが、君を理解できない人は確かに存在するが、それ相応に理解してくれる人も存在するんだぞ。そういう人たちに出会うためにも、人とかかわることを最初から怖がっては、理解してくれる人には出会えないぞ」

「……………わかっていません。ただ、きつかけがわからないんです」

これは、オレの本心。オレは中学校を卒業していないのだ。いわゆる中退である。学校へ行くにはそれなりの特殊な枠組みでしか入学できない。やれることも限られる。

だけど、先生は特別な枠であるが、入学できる術を見せてくれた。

この好意は、オレのことを考えての事だと思う。それに夜間の学校で一般の社会人が枠だから、オレが虐めに会うこともほとんど無い。

「そうか、私が無理に言ってもダメか。わかった、調理師学校なんてもあるから、その辺は一応探しておくから、頭の隅にでも置いておいてくれよ」

「わかりました」

オレは、一礼をして美杉教授のオフィスを後にするのだった。

「なんだかんだ言っつて、オレって先生にすごく迷惑を掛けているんだよな」

どこことなくオレは、ぼやいてみた。先生のところでお世話になって、早く自立がたくて家出当然で先生のところを飛び出して、翔一さんのレストランで下宿し始めたオレの将来について色々と考えてくれるあの人には、いつまでたっても頭が上がりそうにない。

見ず知らずの他人であるオレのためによくやってくれと思う。先生はオレに人と多く接して、多くの事を学んでほしいのだろうな。

オレは、休みの時もとくに用事がない限りは、ほとんど下宿先の自分の部屋で過ごすか、美杉先生の所へ遊びに行くことぐらいしかない。オレは昔の事もあって、人ごみというものが大嫌いなのだ。あの中で、オレの事が知られたら、まさに悪夢だ。

興味本位で行ってみたら、案の定気分が悪くなって動けなくなってしまった。

あの時は、オレと同じ”体質”の子が助けってくれたけど……

只でさえ、人間ってのは、自分の都合のよいものは受け入れる癖に悪いものは徹底的に拒む我儘な生き物なんだから、オレみたいなのが受け入れられるのは、皆無に等しいと思う。

先生が学校の話をしてくれたのは、嫌な気分半分とうれしい気分だった。また、嫌なことに関わって嫌な思いをするという気持ちもあったが、正直、オレ自身は同年代の皆と遊んでみたいという願望もあった。

一度は拒絶したのに、こういう憧れをもつのはあまりに図々しいというか、かなり勝手だと思う。オレ自身、

「…………別に良いんだよな。オレは、このままでも」

学生でにぎわう大学のキャンパスを横目にオレは、なるだけ周りを見ないようにしてこの場から離れていった。その時に、胸が少しだけ苦しくなったのを、感じないように…………

離れていくナツルを窓から、美杉は

「ナツル君も嫌な傷を負ってしまったって難儀なことだ。せめて、一人でも事情を理解して上げられる友達が居れば……………」

TO BE CONTINUED NEXT TO 「迷い

込んだあの子は、三嶋 紅音」

第一話「それは、奇妙な出会いだった」(後書き)

第二話 「迷い込んだあの子は、三嶋 紅音」(前書き)

第二話が書き上がりましたので、投稿します。どうぞっ!!!

個人的に平成仮面ライダー(ディケイドまで)は、アギトが一番好きです。

第二位は剣で、第三位は555ですね。

なんとなく555ではけいおんとクロスさせてみようかなとおもってたり、これでは唯の性格がかなり違うかも(笑)

第二話 「迷い込んだあの子は、三嶋 紅音」

三嶋 紅音

眼鏡を掛け、どこにでもいそうな女子高生。彼女の名は、三嶋 紅音という。

今朝、通学路で発砲騒ぎを引き起こした同姓同名の別人と思うだろうが、彼女達は同一人物なのだ。

彼女はけんぷファーであり、戦うために変身する。その時の変身が、外見の変化と性格である。好戦的でかつ短気。今の彼女では、天地がひっくりかえるようなことが起こらない限りそうはならないと思われがちだが、現実には起こっているのだ。

三嶋紅音は、今朝の事が頭から離れないでいた。

（あの女の人、一体。どういう訳なの？あんな人達と戦うとしたら私は、十分に戦えるのだろうか？）

今朝の好戦的な性格とは真逆の引っ込み思案な思考である。彼女はけんぷファーに変身すると好戦的でかつ、暴力的な気質が全面的に表れる。これは、引っ込み思案な彼女が戦うために必要なフアクターだと思われる。

彼女の悩みは、今朝、自身が攻撃を仕掛けた”アギト”という存在に対してだった。けんぷファーよりも遥かに長けた戦闘能力。あの

ナツルはいつものように、レストランでの接客を行っていた。このレストランアギトの特徴は、一つのテーブルに対して、一人のシェフが付くという営業方法を取っている。

当然のことながらオーナーも一つのテーブルについて、料理をふるまうのだ。ナツルも見習いとして働いているが、その味には定評があり中々のものらしい。

若いながらしっかりとしているとのこと。料理の師匠は、津上 翔一。彼の教え方がよかったのか、今のナツルは17歳にしてこのレストランのベテランでもある。

他にも津上翔一のお調子者でいかげんなところを何気にナツルがフォローしているのは、どっちが先輩、後輩なのかよくわからないといった現象も発生していたこともある。

「ナツルちゃん。また、ごちそうになるね」

「はい。ありがとうございます」

営業スマイルでナツルは、いつもの常連の三十代のおじさんを送り出して、そのまま食器を洗いに裏方へと向かって行った。

ここでのやり方は、大衆向けレストランにはあまり向かないが、一

人ひとりとの交流を持つというアウトホームな雰囲気の人気秘密である。人ごみが嫌いなナツルも仕事での付き合いなら問題なく接することができる。

元々の考えていることと過去の事もあってか、ナツルは親しい人以外には基本的には心を許していない面が存在している。接客業で求められる必要なスキルは持っているが、人づきあいに関しては、まだまだというところである。

これは、ナツルに関わる人間の悩みの種である。美杉教授、真魚ねえ、オーナーシェフ津上翔一も懸念している問題なのだ。

ナツルに関しては、自分の立ち位置に悩む複雑な時期に特殊な事例がいくつも発生してしまっただ故に、かなり難しい問題を抱えてしまっているというのが周りの見識である。

皿を洗い、テーブルを拭いているナツルに翔一からの声がかかる。

「ナツル……！！！！……お客さんだよ！！！！……君と同じ年代の子だから、おねがい」

「あ、はいっ。すぐに行きます」

同年代の子か。珍しいな。ここは、学生の通学路から離れているから、めったにこないんだよね。

三嶋紅音は、見ず知らずの土地に来てしまい、どこか落ち着ける場所ということでのレストラン アギトへとやってきてしまったのだ。

このレストランアギトは駅のすぐ近くに存在しており、掲げられている龍の顔を模した独特のマークが印象的で必ず目にとまってしまう。

ウェイターの人から、ここのレストランは一つのテーブルに一人のシェフが付くという方法を取っていることを説明を受けた。

なんだか、大衆レストランというよりも場違いな高級レストランに来てしまったという想いに紅音が囚われていたとき、その人物は紅音の前に現れた。

「いらつしやいませ。お客様、瀬能 ナツルです。今夜は、よろしくお願いします」

紅音が目が向けるとそこには、ビシツとレストランアギトの制服を着こんだ瀬能ナツルの姿があったのだ。

(こ、この人はっ!!!?!?!?!?!)

紅音は、胸が飛び出んばかりの衝撃を受けた。なぜなら、今朝、戦いを演じた人物と日をおかずにその日のうちに再開するなど、冗談どころではないのだ。

改めて気がついたが、この店の名前は”アギト”と言った。アギトと言えば、目の前に居る瀬能ナツルが変身した”戦士の姿”の名前ではないか。

まさか、この店は”アギト”の集結する店では？

(ちょっと、なんでこんなところに来ちゃったんですか。私はっ！
?!！けんぷファーだって知られたら)

けんぷファーを目の敵にしているアギトも存在しているかもしれない。そんな被害妄想を抱いた紅音は動揺するようにアタフタと始めた。その様子にナツルは、

(急にどうしちゃったんだろ？この子？もしかして、あがつちゃったのかな？こういうときは、落ち着かせるためには……)

この時、ナツルの脳裏にある人物の言葉が浮かんだ。”女性はガラス細工のように扱うものです”

ナツル自身は男でも女でもあるゆえにここは、男の部分で、彼女をリードするべきだろう。この言葉は、ナツルがお世話になったところの刑事さんから送られたものである。

思春期 十代の少女というのは非常に多感なものらしい。刑事さんの話だと………落ち着かせるためにナツルは

「お客様。そんなに緊張しなくてもいいですよ。ここは、アットホームが売りなレストランですから」

ナツルは紅音の正面に座るように腰掛、笑みを浮かべて彼女に語りかけた。ここは、自分が頑張るべきだとナツルは思った。男として……いや、女でもあるんだ……本当にややこしい。

男でも女でもない。本当に自分はどこに落ち着けばいいんだろうか？ここで悩んでも仕方がないので、目の前の事に集中する。

「えっ!!?!?!べ、別にわ、私は!!?!?!」

話しかけられた紅音は、さらにアタフタとし始めた。

「そんなに緊張しなくて大丈夫だよ。ここは、そんなに気を使うようなどころじゃないし、オレの事はナツルって、気軽に言っているから」

紅音に対して、ナツルはまるでなだめるように諭し始めた。アタフタとパニックを起こしてしまった相手を落ち着かせるためには、まずは相手を見ることから始めなければならない。

相手を見るためには、自分から名乗り、自身を理解してもらおうようにしなければならないのだ。とくに女性は、先ほどナツルの脳裏に浮かんだある刑事の言葉のように扱わなくてはならないのだ。

”ささいなことで落ち込んだり、なんでもないことで喜んだりと複雑なんです”

続けて、刑事さんが教えてくれた言葉である。そういうもんなのか？頭の中に聞こえてくる言葉を守るようにナツルは

「だから、緊張しなくていいよ。ここでは、ゆっくりと気楽でいいんだから」

大胆にもナツルは、慌てふためいている紅音の手を取り落ち着かせるように再び語りかける。その時の様子に対して、いけない想像をした方は、ちよつと表に出なさい。

「えっ！！？！わ、私は。べ、別に……」

正面に近い位置にナツルの整った顔が紅音の前に現れた。

（す、すごい美人です。は、肌も雪みたいにし、白い。わ、私、どうしちゃったんでしょうか？こ、この人の顔を見ると胸がドキドキします）

ナツルがアギトである以前に、このナツルという人物、自分の胸を高鳴らせる何かを持っている。紅音は無自覚ながらも感じるのだった。

「だからね。ナツルって呼んでよ」

ナツルは、紅音が話しやすいように笑みを浮かべて話しかけた。

「あ、は、はい。それじゃあ、ナツルさん」

顔を赤くして、紅音は最期は消え入りそうな小声で答えたのだった。

(何だろう。私、ノーマルだと思っていたけど、本当は女の人が好きなのかな?)

紅音はナツルの顔をまともに見れないのか、顔を赤くしてうつむいてしまった。これに対して、ナツルは少し首をかしげる。

(……すごいあがり症だな。なんというか、最近の子は難しいのかな?)

ナツルも紅音とそんなに変わらない年齢なのだが、いかんせん同年代とあまり付き合ったことがないのでこのあたりの感情を察する能力に欠けていた。

「三嶋紅音です」

紅音は、ここでナツルに名前を告げた。彼女なりのナツルに対しての言葉であった。ナツルの脳裏に今朝の騒動で出会った赤髪の目つきが悪い女子高生の姿が浮かんだ。

「紅音ちゃんって言うんだ。三嶋 紅音?どこかで聞いたような」

ナツルは、今朝自分に襲いかかってきた銃を持ったやたら目つきの悪い猛犬のような赤髪の女子高生の姿が浮かんだ。

「あ、はい。私です」

私ですって?どういうことですかい?あなたは、三嶋紅音ですね。

「あの〜今朝。会いましたよね。銃をナツルさんに突き付けた女の子……私なんです」

紅音は恥ずかしそうに、それでいて申し訳なさそうな声でナツルに告げたのだった。ナツルは目の前に居る少女と今朝の猛犬女子高生の姿がオーバースラップする。

「ええええつゝつゝ！！！！！！！！！三嶋 紅音って、あの三嶋紅音！！！！！！！！！！」

突然、告げられた事実に対してナツルは声を上げてしまった。

「そ、そんなに驚かないください。は、は、恥ずかしいです」

ナツルは周りを見る。周りがこっちに視線を向けている。普段のナツルと違う様子に対して、常連さんは目を丸くしてこっちをみている。

「あ、ご迷惑をおかけしました。大丈夫ですから、そのままです……」

謝罪の言葉と一緒にこの場の收拾を図るナツルであった。席に落ち着き、少し コホンと一呼吸入れる。

「で、紅音ちゃんは、どうしてオレの事を？」

「はい。あの時、突然変身してしまったんです。話によるとけんぷファーは、戦うべき相手が近くに居る場合、強制的に変身してしまうんです……」

この時、ナツルはけんぷファーについて知ることとなる。

「これが誓約の腕輪なんです」

そうやって紅音ちゃんは、オレに右腕にはまっている腕輪を見せてくれた。青い腕輪だ。

「けんぷファアの証なんです」

「オレは、けんぷファーじゃないからそういうのは、ないんだけど」

オレは、紅音ちゃんの顔を穴のあくほど見ていた。

「ねえ、もう一度確認するけど本当に今朝の女の子なんだよね？」

「……………はい」

もじもじしながら、紅音ちゃんは再び顔を赤くした。

「……………あれ、私なんです」

「色々とすごいこと言ってたけど、変身するといつもあんな感じ？」
ぶっ殺すだの色々とすごいことを言ってたけど、ここで言うのは、
やめにしよう。オレがいじめをするみたいだから、あんな生き地獄
はやるのもやられるのも嫌だ。」

「はい。どういうわけか、気が大きくなって、人を撃ちたくてしよ
うがなくなるんです」

「……………物騒なっと思って思いたくなるけど、オレもアギトになったば
かりは、力が暴走して目の前にあるものをやたら壊したくなって大
変だった」

「ええっ！！！！アギトって、暴走するんですか！！！！！！」

「暴走したってのも前の話しだし、今はそういうことはないから……」
まだ翔一さん達に出会う前のころだ。アギトになった時、不安定だ
った精神状態も手伝ってかオレは力の赴くままにあらゆるものを破
壊していた。

その犠牲になったのは、もう帰ることの無い実家なんだが、今では
みるに堪えない廃屋になっていると思う。あるいは、更地に……

「そうですね。話が遅れちゃいましたけど、今朝の事はすみません。
こういうのって、私が最初に謝らなければならぬのに」

「いいよ。紅音ちゃんが悪いってわけじゃないから。変身して、そ

うなっちゃうのは仕方がないってことだから」

「ありがとうございます。どうして、けんぷファーに変身してしまったんでしょうか。けんぷファーが戦う相手はけんぷファーなのに、どうしてナツルさんのようなアギトに…」

「悩んでも仕方がないし、紅音ちゃん。ご飯、まだだよなって、ご飯食べてないからここに来たんだっただけ」

「あ、そういえばここ、レストランだったんですね。メニュー、見せてもらっていいですか？」

「うん。いいよ」

オレは、紅音ちゃんにメニューを渡して注文を待った。この時、オレ達に視線を向けるあの人の存在に気が付かなかったのだが、

「よかった。ナツル君にもちゃんと、友達が居るんだな」

オレにとって一生頭の上がない美杉先生が居たことに……………

オレは紅音ちゃんが注文した料理を作り一旦テーブルを離れた。紅音ちゃんが注文したのは、スパゲッティだった。ペペロンチーノね。

紅音ちゃんは、オレがここでのシェフって言うことにも驚いてたけど、それ以上にオレと同じ年にびっくりしていた。オレって、そんなに老けて見えるのかな？

なんだかんだ言って、オレは注文した料理を持って紅音ちゃんの待つテーブルに戻るにいたったんだけど。

「おいしいです！！！！ナツルさん！！！！！！！！！！」

「オーナーからの直伝だからね。翔一スペシャル、お勧めだから今度、試してみる？」

「はい！！ナツルさんがお勧めなら、きっとおいしいんですね。あ、そういえば、ナツルスペシャルっていうのがメニューにあったような」

「ああ、あれオレの創作料理。その日の特選食材で作るコースだよ」

ナツルスペシャル。最近、ここで許されたオレのメニューだ。メニュー

ユーのなるぐらいだからオレの腕は相当なもんになっている。カッブめんしか作れない奴らとは大きく違うのだよ（悦）

「ええっ！……じゃあ、明日もここに来ます！！！！来てもいいですよね！！！！！！！！！！」

期待がこもった目で紅音ちゃんはオレを見る。

「うん、良いよ。明日もちゃんといえるから、いつでも歓迎するよ」うれしそうにいう紅音ちゃんに対して、オレはなんとなく嬉しくなった。だって、女の子は笑っている方がいいよね。

オレがアギトだってことを知っていてこんな風に笑ってくれる子なんて、この先絶対に遭うことはないと思ってたけど。

やっぱり、けんぷファーも変身だって言うから、アギトとわかりあえるところがあるのかな？

だけど、オレのどっちでもない体についてはどう思うのかな？同じ体質のあの子は、自分自身を受け入れているけどオレは、まだ自分自身を受け入れていない……

気持ち悪いって言わないかな……そんなことを仕事中に考えるのはよそう。今は、紅音ちゃんが喜んでくれるならいいんだ。

オレはいつも心の隅に置いている暗い影が浮かび上がってくるのを感じつつ、紅音ちゃん的笑顔を見ていた……

それから、しばらくは、紅音ちゃんと話しつつも楽しい時間は過ぎ

て行った。時間も時間だったので、紅音ちゃんは一時間ほどで店を後にした。

オレに向けてくる笑顔がすごくまぶしく見えたんだ。

駅のホームでは、紅音が名残惜しそうにレストランアギトに視線を向けていた。

「ナツルさんか。すごく綺麗な人…あ……」

紅音はナツルの事を思い出すと胸が高鳴るのを感じた。悪いものはなくどことなく心地の良い響の鼓道だった。

聞きなれた汽車の音を聞き、紅音は乗り込んだ。窓から遠ざかっていくレストラン アギトをいつまでも眺めていた。

る。彼女の目に映ったのは、古代の遺跡に描かれた半神半獣の神々に似た姿を持つ異形。

彼女は勇ましく銃を構え、獣のように鋭い眼光を”けんぷファー三嶋紅音”に視線を叩きつけるジャガーロードと対峙し、気が短い紅音は銃の引き金を勢い良く引く。

硝煙のにおいと勢いよく吐き出された空薬きょうがアスファルトの上を跳ね返る。発射された弾丸はまっすぐジャガーロードに当たるが、

「GUUUU」

ジャガーロードに当たった弾丸は、火花を上げるもののその体には傷らしい傷が存在していなかった。

「ああっ!?!効かないだ!?!?!」

紅音は、このジャガーロードに対して足が僅かに後退するのを感じた。今朝のアギトのようにけんぷファーでは、太刀打ちできないさまざまな力を持っていることだけは確かなのだ。

アギトのように消極的ではなく、こいつは、自分を殺すつもりで前に現れた。そう思わずにはいられないほどの殺気を感じたからだ。

そのころ、ナツルはレストランアギトで食器の後片付けを行っていたのだが、

「それにしても、なんでオレ、紅音ちゃんと話したんだろう？」

ナツルは先ほどまでの時間を不思議に思っていた。今朝は、けんぷファー、自身のアギトに関することに關しては一生関わりたくないと思っていたのに、どうしてけんぷファーである紅音という少女と関わってしまったのだろうか？

これまでのナツルは、人とは違う”身体”故に他人に理解されず、それゆえに壁を作り他者を拒絶していた。その壁を乗り越えるものは誰ひとりとしていなかった。

ナツルが壁を乗り越えることを許さなかったからだ。一度会えば、それっきり。それだったのに、継続的な関わりを持つとする存在が現れた。

三嶋 紅音。 どうして、彼女の笑顔心地よく思ったのだろうか？
自分の普通とは違う身体に対して、彼女はどう思うのだろうか？

” 明日もまたきて良いですか！！！！”

いつも客が言っていて、聞きなれた言葉なのにどうして、彼女の言葉は自分に響くのだろうか？

ナツルが、そんなことを考えていたとき、突然、それは、ナツルの身に降りかかってきた。

” ギンツ！！！！”

すさまじい感覚がナツルの体を駆け巡る。

「な、なんだ？またかよ…今日は、なんだっていうんだ」

なれない感覚に対してナツルは手元を滑らせ、持っていた食器の何枚かが床に落ち、派手な音を立てて割れていく。

脳裏に紅音の姿が浮かび、彼女に忍び寄る黒い影の存在が映し出された。

「あかねちゃん！！！！！！！！！！」

ナツルは、満面の笑みを浮かべる彼女の姿を思い出すと同時に彼女の身に恐ろしい危険が迫っているのを感じ取っていたのだ。

気が付けば、ナツルはエプロンを投げ捨て、ものすごい勢いで店を飛び出していった。居てもたつてもいられずに店を飛び出したナツルを見て、翔一は。

「ナツルっ！！どこへ行くんだっ！！！！！！」

裏に止めてあったバイクに乗ったナツルの背を見送るように翔一は呼びかけていたのだが、

”キイイイイイインツ！！！！！”

ナツルが感じたのと同様の感覚が翔一にも感じられた。

「この気配。まさか、アンノウン？」

数年前に感じ、今まで感じられなかったあの恐ろしい存在たちの気配を……

自分も行かねばという思いにとらわれるが、ナツルは誰かの名前を叫んで飛び出していった。アンノウン。かつて、翔一たち”アギト”が戦ったある”力”に従属する”異形の天使”達。

ナツルは、このアンノウンの気配を感じたからこそ、飛び出したのかもしれない。翔一は

「ここは、ナツルに任せてみるか。なんだかんだ言っ、頼りにしているからな。俺も」

そう言っ、店内に戻ってしまった。ここは経験者が行っても思っのだが、翔一はナツルが行ったのならと安心しているのか、それ以上のことはとくに言わなかつた。

「がんばれよ、ナツル。何かあつたら、無理しないで逃げて来いよ」

踏ん張りつつもジャガーロードと距離を取る。

避けた先にいたのは、アスファルトに出来上がった摩擦熱によって引き裂かれた道路であった。

「なんつう…こいつ、どうしてけんぷファーを襲うんだ？」

まるで因縁をかけるようである。この怪物は、最初から自分を狙っている。圧倒的な力を持って……

「GUUU……」

離れようとするあかねに対して、ジャガーロードは容赦することなく近くに止めてあった乗用車をつかみ、その車体に驚異的な握力で爪をくいこませて持ち上げ、紅音に向かって投げ飛ばしたのだ。

「お、おいっ！！！！無茶すんな！！！！！！」

紅音は急いでよけるが、勢いよく投げ飛ばされた車体がアスファルトに撃ちつけられた衝撃に対して、足もとを崩し、転倒してしまっ

た。体に痛みを感じつつ、紅音は立ち上がろうとする。気が付くとそこには、ジャガーロードの鋭い視線が自分を見下ろしていたのだ。

「しまった！！！！！！」

ジャガーロードは紅音の頬を叩くようにして殴り飛ばした。その際に、紅音は銃を落としてしまい、完全な無防備な状態へと追い込まれてしまった。

「や、やべえ……」

何とかして武器を取りも出さなければならぬのだが、武器はすでにジャガーロードの遙か背後にあるのだ。アレを出し抜くなんて正直無理だ。

(くそっ!!! あたしは、ここで死ぬのかよ!!! じょうだんじやない!!!! 明日も行くって約束したのに、こんな訳のわからない奴にころされるなんて!!!!!!! くそ!!!!!!!)

胸の内で悪態をつき、ゆっくりと迫りくるジャガーロードに対して自分は何もできないのだ。そんな時だった。

”ブウウウウウウウツンツン!!!!!!”

「GUUツ!?!」

背後から強力な力の本流をジャガーロードは感じた。そこに立っていたのはナツル。

「な、ナツルっ!!!!!!」

紅音は、突然現れたナツルに対して驚きの声を上げた。ナツルは、先ほどとは違って違って険しい表情でジャガーロードを見据えていた。

ナツルの腹部には、アギトの力の象徴ともいえるベルト”オルタリング”が巻かれ、その中央には”龍の眼”が黄金の光を放っていた。

「U、GUOOOOッ！！！！！！」

二メートルはあろうかという巨体が宙に打ち上げられ、そのまま地面に受け身を取る暇もなく叩きつけられた。

倒れたジャガーロードにアギトは冷静に目を向けつつ、ベルトの左にあるボタンに手を掛けると同時に龍の目から槍状のものが飛び出し、それを手に取ると同時に左半身に鎧のようなものが現れ、胸部のプロテクターが青色に変化する。

「青くなった！！？！！！」

アギトの形態”超越精神の青” ストームフォーム。ストームフォームにチェンジしたアギトの姿と自分の右手にある青い腕輪と交互に見る。槍状のものは、一瞬にして両刃のナギナタに変形する。

「フンッ！！！！！！」

アギトは、軽々とナギナタを振るう。そのアギトに対して、ジャガーロードは起き上がり槍をつきたてながら、向かっていく。

「GUOOOOOOOO！！！！！！！！！」

獣を思わせる方向を上げながら、槍をアギトに振う。

「ハッ！！！！！！」

これをアギトは両刃のナギナタを振うことによって弾くと同時に反撃をも行う。ジャガーロードはこれを回避し、反撃を行う。

そのまま近くのマンションの壁に叩きつけられ、ジャガーロードはほとんど虫の息の状態であったが、それでも何とか立ち上がり、アギトに向かつていく。

アギトは、青い形態ストームフォームの変身を解き、通常形態に戻ると同時に向かってくるジャガーロードの腹部に強烈なこぶしをぶつける。その衝撃により、再び後方へ押し戻される。

「ハアアアアアア……」

拳法を思わせる構えを取ると同時に額にある黄金の角が二本から六本に展開したと同時に足もとに光り輝く龍の顔を思わせる紋章が現れる。

「フンッ！……！！！」

アギトは垂直に飛びあがり、後方に押しも出されたジャガーロードに対して鋭い蹴りを繰り返したのだ。

「破アアアアアッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

ジャガーロードの胸部に強烈なエネルギーを伴った蹴りが加えられ、その力によりジャガーロードはさらに後方へ吹き飛ばされ、坂を勢いよく転がるモノのように転がっていく。

勢いよく吹き飛ばされたジャガーロードは、後方に不法に止めてあった車両にぶつかり、勢いが止まり、胸をかきむしりようにして苦しみだしたと同時に頭上に光の輪を発生させて

「GUOOOOOOOOOOOOOOOOツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

獣の咆哮を上げると同時に、爆発した。止めであった車のガソリンにも引火し、周囲を一瞬にして明るくしたのだった。この光景に対して紅音は

「……………やりすぎだっつーの」

自分が手に負えなかったあのジャガーの化け物を圧倒的な力で倒したアギトことナツルに対して、そんな感想を漏らしたのだった。

「でもな。助けしてくれたことには、感謝するぜ」

ニツと笑って、紅音は背後の炎をバツクにこちらへ歩み寄るアギトに笑みを向けるのだった。アギトから元の姿へナツルは戻る。

「あかねちゃん。怪我はつて!!!!!!!!、血が!!!!!!!!」

紅音が額から血を出しているのを見て、あわてて駆けですが、

「良いんだよ。かすり傷だ。どうせ、変身を解けば、怪我は治るんだ」

紅音は、そう言って元の引っ込み思案の眼鏡の少女へと戻る。

「ですから、大丈夫ですよ。この通りです」

先ほどまでの怪我はなく、いたって健康な紅音の姿がそこにあった。

「本当に治るんだ。便利だね、アギトはそうもいかないんだよね」
アギトの場合、ダメージが深刻すぎると変身を解いた後でも続く場合がある。そう思うと、けんぷファーは便利かもしれない。

「そうなんですか。けんぷファーにもアギトよりもすぐれているところはあるんですね」

ここで紅音が感心する。戦闘能力の面ならアギトはけんぷファーよりもすぐれているが部分的には、けんぷファーの方がすぐれている面もあるようだ。

「うん。でも、少し騒ぎが大きくなりすぎたから、離れようか。紅音ちゃんちは近いよね？」

「ハイ。すぐ近くですが」

「じゃあ、早く離れよう」

紅音の手を取り、ナツルはすぐ近くに止めてあったバイクにまたがって、紅音の家まで走るのだった。

この時、ナツルは先ほどの敵に対してこんな感想を抱いた。

（もしかして、けんぷファーに関わる脅威って、あの怪物の事なのか？）

現場から去っていくナツル達を二体の異形の影が見ていた。獣のような鋭い眼光を向けながら…

「AGITO」

「AGITO」

紅音は、新しくおもちゃを買ってもらった子供のようにつきつきとした気持ちで携帯電話の画面を見ていた。

<瀬能 ナツル>

ご丁寧に顔写真の画像も存在していた。これは数分前に交換したナツルの番号とアドレスのデータなのだ。

” 紅音ちゃん。また、何かあったらオレに言ってよ。すぐに駆けつけるから”

” えっ！！？！な、ナツルさんがまた、助けてくれるんですか！！？！”

” うん。何かあったら、大変だろ…それに…”

” それに？”

” アギトの事を知って、オレに笑いかけてくれるのって、皆以外だ

と……紅音ちゃんしか知らないから……”

どことなく照れたような様子でナツルは、紅音に対して答えるのだった。

「おいつ、紅音。何か、良いことがあったのか？」

紅音に話しかけてきたのは、血走った赤い目の黒いウサギのぬいぐるみだった。小さな手に刀を握り、臓物がはみ出ている。名をセツブククロウサギという。

「はい。今日、素敵な女の人と知り合えたんです。あ、でも、そんなじゃなくて……あ、でも、でも、ナツルさんとだったら、私、良いかも」

突然紅音は、顔を赤くしてうつむいてしまった。そして、もたえるようにベットに付して転がり始めたのだ。

「きゃー！！！！きゃー！！！！ナツルさん！！！！だめですってば！！！！！！女同士で！！！！！！」

「そこまで聞いてねえよ。いいことがあったのか？」

口がこれまた悪い。今の紅音には、セツブククロウサギの声が届いていないようである。それどころか、何か楽しいことを思いついたように嬉しそうな笑みを浮かべている。

「……バイクに乗ってきて、怪物たちと戦う正義の味方が。あの噂の人って、もしかしてナツルさんかな」

自分がクラスメイトから聞いた赤いイナゴを模したバイクに乗った銀色の男の話。その男は、”仮面ライダー”と名乗ったそうだ。

ナツルは、黄金の体をしており、噂の男とは正反対である。

「ナツルさんは、アギトって言ってたから、仮面ライダーアギト。仮面ライダーアギト」

良い響だと紅音は思った。たいていヒーローは、カッコいい男性がやるのだが、これからの時代カッコいい女性がヒーローであつてもよいではないかと思う。

「こんど、ナツルさんに言ってみようかな」

「仮面ライダー？アギト？紅音、今度は、ヒーローものでもチエックを入れ始めたのか？」

「TVの話ではありません！！！！現実の話です！！！！！！！！！！」

この夜、セツプククロウサギは”瀬能ナツル”なる人物について、紅音からたっぷり語られることとなったのだ。

「ったくよ〜。その女に一目ぼれかよ？付き合えよ、いつその」と

「ええっ！！！！わ、わたし、そんなんじゃ！！！！！！！！！！」

顔を赤くして、照れる三嶋紅音。彼女は、ものすごくシャイなのだ。

「ああ」「〜、めんごぐわ」

セツプククロウサギは目の前の少女に対してそんな感想を抱くのだ
った。

翌日、紅音のマンション付近でなぞの爆発事件が起こったことが新聞の一面を飾ったのだが、真相は依然闇の中である。

「ナツル。最近、また事件が起こっているな」

翔一が珍しく新聞に目を通していた。話しかけられたナツルは、その話題に触れたくないのか、僅かだが視線が泳いでいた。

「そ、そうですね。夜は危険が多いっすね」

わざとらしく翔一に返事をするナツルであった。口調もなんだか変になっていた。

「だから、用心しないと」

ここでもわざとらしく、戸締りの点検を始めてしまつ。そんな挙動不審なナツルを翔一は不思議そうに眺めるのだった

都内の高級マンション

ここは、高額所得者が住むセレブの高層マンション。このマンションの一室で、新聞を見つつ窓に反射した少女の姿が映し出された。焦点の定まらない光の無い目をしている。

新聞に載っているのは、ここより離れた場所で起こった爆発事故についてだった。

「この間のアレは、無駄にはならなかったみたいね」

薄暗い室内で少女は笑みを浮かべる。色白の肌に切れ目のような笑みを作り、背中に黒い影を抱えながら部屋を後にする。部屋に残されたのは、臓物アニマルシリーズのぬいぐるみたちが不気味に鎮座している光景だけであった。

「赤のけんぷファー達には、もっと動いてもらわないと……そうしないと話が進みませんからね」

” あ の 場 所 ” に は 関 わ り た く な か っ た 「
T O B E C O N T I N U E D N E X T T O 」 で き れ ば

第二話 「迷い込んだあの子は、三嶋 紅音」 (後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0557z/>

けんぷファー With ~AGIT~

2012年1月10日02時46分発行